
人は生まれ変わる

夢名

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人は生まれ変わる

【Nコード】

N8962K

【作者名】

夢名

【あらすじ】

二人の女性からそれぞれ希望・勇気・夢を授かることにより新しい人生を歩みだし始める男性の姿を書いたものです

序章

私は時々思うことがある。

「人は何のために生まれ、何のために生きているのだろうか？」

「後世に何を残しせるのだろうか。そのために自分はいったい何ができるのだろうか？」

その時々で考えは確かに変化している。

しかし、私は思う。

“命”

これほど大切なものはないであろう。人も含め“命”あるものすべてが尊い存在であることに間違いない。たとえ志半ばで潰えようとも、それでもその“命”が残したものには必ず何か意味があるに違いないと思う。

命とは何だろう。人は生きている瞬間、いったい何ができるだろう？

一つの瞬間でどれだけ多くのことを伝えられるものであろうか？

一人の女性が死と向き合い、自分の遣り残したことを大切な人に受け継いでもらう決意をした瞬間の生きることへの希望・勇気を、彼がどのようにしてそれを受け入れていくのか、どのような形で成し遂げていくのかを語っています。

病に侵され傷心した少女が最後の瞬間、

「私はこれからどうなるのだろうか？」

「どうしたら私はいいのだろうか？」

「どうしたら生きることの喜びを伝えられるのだろうか？」

「何が私にできるのだろうか？」

必死に悩み、苦しみながらそれでも懸命に生きる姿を通して、少女の命を通して心を伝えらるという内容である。

生きることへのすばらしさと勇気と希望を与えることができた、そして命の尊さを訴えている、人の心へ大切なメッセージを伝えることの大切さを語っています。

二人から“命”を受け取った彼がどのような心境変化があったのか、また、彼がそれをどう捉え、どう生かしていくのかを語っています。

第一章 希望・勇気を受け継ぐ男性

彼は学生時代から非常に優れた人である。人望も厚く、勉強も出来る。まさにまれに見る天才である。ルックスもいいし、スタイルも抜群である。誰しもがうらやむような人物である。

社会に出てからもその才能はとどまるところを知らない。

仕事は優秀、どんな無理な仕事でも出来てしまう。さらにもっと自分に出来ることはないか、手伝えることはないかと探すくらいである。

会社の組織人としても言うことなし。まさに完璧な社会人である。社運をかけた大規模なプロジェクトの一員に大抜擢されたときでも臆することなく、それでいて威張ることもなく難なく成功した。

でも周囲からは

「彼がいたからこそ成功できた」

と絶賛されるほどの功績を残したのである。

もちろん他社がそんな人材を見逃すはずもないし、野放しにしているわけでもない。

何とかわが社へとヘッドハンティングもあった。

それでも彼は自分なりに考え、現会社に残った。その大きな理由として、彼の心に存在の大きな女性がいたからである。彼がライバル

視し、しかも恋も抱いていた。

彼女は全く気づかずにいた。彼女もまたまれに見る才女であった。誰からも好かれ、仕事もバリバリできる。それだけに男性からは近寄りがたい雲の上の人となっていた。彼も当然そのように思っていた。

仕事を一緒にする機会もない。話すチャンスもない。それでも彼にとっては会社に残る大きな理由となっていた。

ただ、彼はほかの男性たちと違った感覚を覚えていた。

そんなとき彼女が彼にほんの一瞬だったが微笑みかけたのである。理由は分からない。しかし、嬉しくてまさに天まで昇るような気持ちであった。

何気に横に座ってみた。

そしたら彼女から話し掛けてきた。

「どうしてそんなに仕事、がんばれるのですか？」

唐突であつたし、びっくりして返答に困ってしまった。それでも何か言わなきゃと思い

「あなたもすごいですよね」

と返答しまった。

あわてた。それもそのはず。彼がいつも彼女のことを気にしていたことを暴露したような感じの返答であつたからだ。彼女が、

「私はいつもあなたのことを見ていました。正直に言って、私はこの人には叶わないと思いました。」

彼は、

「そんなことはない。あなたこそ僕よりも数段もがんばっているじゃないですか」

彼女は、

「がんばってきたのはあなたというライバルがいたからこそ出来たことです。私はそんなに強い女ではありません。むしろ弱い人間です・・・」

彼はとつさに

「そんなことはない。あなたは仕事もきっちり誰よりも出来ているし、ここ一番という状況での判断能力にはすごいものを感じます。だからあなたのことがいつも気になっていました。あなたがこの会社に入社してきたときから」

恥ずかしい・言っちゃだめだと自分に言い聞かせていたが思わず本音が出てしまった。彼自身顔が赤めいていくのが手に取るように分かった。

それを見た彼女が微笑んだ。そしてまじまじと彼の顔を見ながら

「私、好きよ。あなたのこと」

と一言さりげなく言つてのけた。

それを聞いた彼は驚いたが、即座に、

「僕もです」

と返答した。

しばらく沈黙の後、彼女が重たい口を開いた。

「私はあなたと結ばれない運命なの」

耳を疑った。それはそうだろう。普通なら交際スタートとなるはずだから。ところが彼女からの言葉は違った。次の言葉を聴くまでは彼に言おうか言うまいかなり迷っていた様子である。しばらくして何か吹っ切れたのか重たい口が開いた。

「私、病におかされていて、残り少ない人生なの。だから私の持っている夢をあなたに託したいの。私の仕事上での技術や私の遣り残したこと、すべてをあなたに託したい。」

といった。

彼は思わず口走ってしまった

「でも何で僕なのですか」

と。付き合うわけでもない。しかもたった今、彼女からその理由も聞いた。なのになぜ私なのだろう。当然、湧き出てくる疑問である。確かに彼として本心だったろう。しかし、彼女を傷つけないための言葉を選んでいる余裕すら彼にはなかった。

しかしそんな彼の気持ちは無視され、さらに続いた。

「あなたじゃないとだめなの。私の病気は現代医学ではなおらないふちの病らしいの。だからどんなにあがき苦しんでもダメなの。すごく悩んだし、苦しんだ。でも、運命だから受け入れるしかないの。でも遣り残したことが沢山ある。それをあなたに継いでもらいたい。あなたなら私の夢を叶えられる人だと確信しているから。もちろん勝手に一方的なお願いだというのはわかっているの。それでもあなたに私の夢を託したいの。だって私が唯一好きになった人、心の底からこの人になったら私が元気でありさえすればすべてを捧げたいと思っただから」

彼は、彼女の一言ひとこと胸に響いていた。心の中で

「なんて強い人なのだろう。誰にも悟られることなく一人で悩んでいただろうに。運命を受け入れる覚悟もしている。しかも命の重さも分かっている、それでも自分の夢も追いかけようとしている。すごい、本当にあなたはすごい人だ。僕も生まれて初めてライバルと認めた人なのだよ、あなたは」とつぶやいていた。

彼女は彼の目を瞬きすらせず、一途に見ていた。そして

「病気でなければ・・・」

一瞬、言葉がつまった。そして初めて見せる彼女の涙。

彼にはその涙はどんなに大きく、どんなにきれいに出来た宝石より美しく輝いて見えた。

彼女が声を詰まらせながら、

「私はあなたの元へすべてを捧げたかった。でもそれは無理だから、せめて私の夢だけでも託したいの。そうすることであなたには幸せになって欲しいの。私の夢をあなたが実現してくれることで、私が現世に間違いなく存在していたことを証明したいの。あなたを利用するのではなく、あなたと私の夢が一つになってあなたの心の中で生きて行きたい。それだけではだめですか？」

もちろん彼女の勝手なお願いである。彼にとっても負担になってし

まう。彼女もそんなことは百も承知である。それでも彼といつも一緒にいたかったのだろう。その思いでいっぱいであったのだろう。そのときは二人とも別々に帰宅した。ただ、彼は納得できないでいた。彼女の勝手なお願いのこともだが、

「なぜ今になって僕にそんなことを頼んできたのか」

「どうしてもっと早く病氣のことを教えてくれれば僕も一緒に悩み、苦しみ、いつもそばにいてあげられたのに」

それとは逆に、

「今まで黙っていたなら、最後まで黙っていればいいじゃないか。なぜ僕に病氣のことを話したのだろう。」

という思いでいた。悩んでいた。そしてあせっていた。彼自身！

「彼女には時間がない。少しでも早くどうにかしてあげないと、余計な心配をさせてはだめだ」

しばらくそのままいつもと全く変わらない日々が続いた。

もちろん彼の心中は荒れていた。しかも、日増しにそれが強まっていった。

ある日、思い切ってデートに誘った。

デートは普通に車でドライブ。目的地があるわけでもない。ただ気の向くままに車を走らせているだけ。そして昼になったから食事へと本当に普通のデートであった。ただ違っていたのはお互いに口を開こうとはしないのである。それでも彼女はどことなく嬉しそうである。彼も嬉しく感じていただろうが、結論を出せない自分に腹立たしいものを感じていたのも事実だろう。一見穏やかそうに見えても、いらいらした様子が伺えた。彼女もその気持ちを察してあえて口を開こうとはしなかったのかもしれない。

車を路肩に止めた。

しばらくして、彼が重たい口を開いた。

「僕と一緒にしろ」

と言った。たったその一言だけだった。彼は彼なりに考えに考え抜いた上での結論であり、言葉もそれしか思い浮かばなかった。もっ

と気の利いたすばらしい表現を一生懸命、考えたが思いつかなかった。

彼女は驚いて、

「何を言っているか分かっているの？私は病気なのよ。しかも、後どのくらい持つかわからない。あなたには話したわよね？だったらそんなことはいえないはずよ」

語気が強まった。当たり前である。彼女の返答は当然である。楽しそうにしていた彼女が突然涙を見せ始めた。彼女からしてみれば、彼の言葉は私のことを侮辱しているか、同情しているとは思えないのである。普通、病気の人、それも限られた時間しかない相手を選ぶだろうか。もちろん付き合い始めたところが健常者であったのなら理解できる。今回は最初から彼女の病気のことを知りながら出した結論だったから余計、侮辱したように思われても仕方がない。

ところが彼は違っていた。彼女の怒り、傷ついた心など全く無視して「後どのくらい生きられるの」

真剣な目で話してきた。彼女はあまりの真剣な目だったので、思わずそらすことも出来ないまま、

「お医者さんが言うには、後、数ヶ月らしい」と真剣に返答した。

彼は、

「そうか、まだそれだけ時間ある。じゃ、このまま教会へ行こう。そして結婚しよう」

彼女の目を見ながらと言った。彼の目は、まったく曇りなど微塵もなかった。

何を言っているのか全く理解できない彼女であった。いくら才女とはいえ、現状を把握できないでいた。病気である。しかも残り少ない人生である。

思わず

「ふざけているの。そんな冗談は絶対許さないわよ」
かなり怪訝そうな表情である。当然である。

しかし、彼の目を見た瞬間、彼女の表情も変わった。そう、彼は真剣そのものであった。彼女は心の中で

「この人は真剣だ。でもどうすることも出来ない」

さらに

「なんで私、こんなことになったのだろう」

「どうして私が？」

「私が何か悪いことをしましたか？神様、いるなら教えて」

悔やんでも悔やみきれなかった。彼女が病気でなければ結ばれていただろうはずの恋もかなわない。彼女がどんな思いであるのかを考えると本当につらいことである。

彼女が彼の真剣なまなざしを見て彼に言った。

「ごめんなさい。本当に。私にはできない。本当に有難う」
さらに続いた。

「でもいくらあなたが真剣でもそれは出来ない。だって、私・・・」
泣きながら声が詰まっていた。

彼も涙を頬に流しながら言った。精一杯の言葉を

「それでもいい。それでも・・・それでも君と一緒にいたい。残された君の時間を僕と一緒に共有したい。そして君の事を心に刻んで君の分まで生きて行きたい。だから何も心配いらぬ。結婚してくれ。これが僕の出した結論だ。だから、受け取って欲しい」

しばらく沈黙が続いた。

彼女自身うつろたえていた。まさかこんなことになるとは想像もしていなかったし、心の準備も全くしていなかった。心の中で

「嬉しい。本当に・・・でも、こんなことって・・・」

彼女の本心であつたろう。自分の近い将来がどうなっているのか分かっていただけに、今度は彼女自身がつらい決断を求められた。彼がそこまで考え抜いて出した結論というのは十分過ぎるほど分かった。

彼女から

「それは出来ない。同情なら失礼よ。同情なんかいらぬ」

もちろん彼がそんなことするはずないというのは十分すぎるくらい分かっていたし、真剣であるのも分かっていた。でも彼女としては素直な気持ちになれなかった。どうしてもかは彼女自身にもわからない。いつもの自分とはかなり違って思うように感じていた。恐らく彼の人生に傷つけたくないという思いからだっただろう。

「同情？本当にそんな風に思っているのか？私がそんなに小さい男に思えっっているのか？」

少し厳しい口調で言った。

「本当に嬉しい。でもあなたの将来のためにならないもの。そんなことは絶対だめです。」

彼女なりの精一杯の返答である。泣き出しそうな表情をしながら、でも涙は出さないという覚悟の上で。

彼が目を見つめながら

「分かっている。同情・哀れみなんかじゃない。僕は僕なりに真剣に悩み考えた。今までここまで考えこんだことあったらどうか、そのぐらい必死に考えた。考え抜いた。その結果だ。どうかしているのは君のほうだ」

彼だっけわかっていた。こんなときはぐらかしたり、「冗談したりする人ではないことぐらい。しかも私の人生を汚したくないと考えることも。でも思わず言わざるを得なかった。

彼が言った。

「僕のことは気にしなくていい。君の本心を知りたい。もちろん時間がないことは分かっている。それでも僕は君と一緒にいたい。そして心に君の事を僕の心に刻みたい。僕の心の中でずっと生きていて欲しい。」

と。

彼女は、その言葉を聴いたとたん泣き崩れた。彼の腕にもたれかかるようにして。

そして、しばらくして小さく、本当に小さくうなずいた。やっと彼女も心から素直に喜ぶことが出来た。彼の思いを真正面から受ける

ことが出来たのである。

二人はそのまま教会へ行き、二人だけの結婚式を挙げた。誰からも祝福されることのない、参列者もない、それでも二人は幸せだと感じていた。

二人はのこり少ない時間を大切にしようと必死だった。仕事以外はいつも二人で寄り添っていろんなことを話し合っていた。寝る間も惜しんで。彼女が自分へ何を託したいのかを少しでも理解するためにも彼女だけを見つめていた。

わずか数ヶ月。本当に短い時間である。それでも二人にとっては人生で一番長く、誰よりも幸せに感じた時間であつたろう。

しかし、そういう幸せも長くは続かなかつた。医者から聞いていた時間より短かつたのである。ふたりして愕然となつた。

ついにその瞬間が来てしまった。二人とも覚悟は出来ていたが、やはり突然だったのでショックを隠しきれないでいた。彼女は病院の寝台に寝たきりで意識が回復しない。彼はずっと彼女から離れようとしなない。

二度と目覚めることはないと分かつていた。それでも彼の献身的な看病が続いた。いつ果てるともわからない彼女の命と向き合っていた。彼女の手をじつと握つたままである。意識はなくとも手と手で会話をしているようだった。はかない切ない、でもどこか幸せそうな二人であつた。

二人を見ているほうがどうにかなりそうなくらいである。

何を聞いても、何をしても返答すらない彼女。黙ってひたすら彼女の世話をしている彼。二人が何をしているのか分かる人は誰もいない。二人は心で会話していたのだ。肌と肌をあわせるだけで何を言いたいのか何を伝えようとしているのか分かつてしまう。それだけ心が通っているのである。言葉はなくとも心が通じ合うまでになっていたのである。不思議である。誰よりも短い時間しか共有してない二人なのに、それでも誰よりも長い時間を共有したのである。それだけお互いのことを信じあっていたのだらう、本当にお互いを認

め合っていたのだろう。すばらしい、実にすばらしいことだ。普通では出来ないことだ。長い時間、夫婦をしていてもお互いの気持ちがすれ違いということはよくある。他人同士が一つの家庭を作り上げていく。そのために夫婦は人並み知れず努力し、お互いに協力しあう。そして、それぞれの家庭が出来てくるのである。喧嘩をしたり、仲たがいしたり、いろいろな経験を通り越して、やっと一家庭が出来てくる。しかし残念なことに、熟年離婚という言葉をよく耳にする。嘆かわしいことだ。それまでの二人の時間は何だったのだろう。無駄な時間だったのだろうか？そんなことはないはずである。二人が結ばれて、めでたくゴールイン。すばらしいことである。それなのに、第二の人生始まりというときに夫婦生活にピリオド。いったい何が起こっているのか私には理解できない。それからしばらくして二人にとって永久の別れのときがきた。二人の表情に全く曇りがない。いつも、いつまでも二人一緒だという表情である。

心が通じ合うことがこんなにもすばらしいものであることをどれだけの人が理解しているであろう。

彼は一人で帰っていく。彼女の心から生きることへの希望・勇気を受け止めて。

少しさびしげではあるが、それでも現実と真実をしっかりと心で受け止め、まっすぐ前を向いて病院を後にした。

その後、彼は会社へ休暇届けを出し、旅に出た。どこへいくとも知れず気の向くままに出て行った。何も持たずに、すぐそこへ買い物に言ってくるぐらいの軽装で。

彼が物思いにふけっていると彼女がいつも微笑みかけてくる。

「大丈夫？しっかりと。こうなるのは分かっていたことでしょう？あなたならきつとやれる、そう信じたからこそ私はあなたの重荷になると分かっているあなたに受け入れたのよ。大丈夫、私の信じた唯一の人だもの」

もちろん分かっていた。でも本当になつてみると心にぽっかりと大

きな穴が開いたようで、どのようにして埋めていいか分からないでいた。彼も人である。どんな人であっても心のよりどころを失えば、動揺もするし、途方にも暮れる、それが人間であると思う。感情を持つている証拠である。その人にとってもっとも大切な存在の人を失ったとき、同様もせず、途方にも暮れず、ごく普通の精神状態に入れる人は誰もいないと信じたい・願いたいものである。どれほどの日にちが経ったであろうか、これといってすることもなくただ毎日同じ海岸端に来ては遠くを見ているだけである。雨が激しく降った日も、風の強いでも同じである。ただ毎日同じ海を眺めていた。

さびしい　むなしい　日々

分かっていて　短い時間というのは

彼女が私に託してくれたこと　分かっている

それでも　さびしい　つらい

この心の隙間を埋めたい

どうすればいいのだろう　だれか教えてくれ

どうしたら心の隙間を埋められるのだろう

毎日が楽しく　一緒にいるだけで　暖かったあの時間

もう戻れない　あのころへ

それでも彼女の思いを受け止めなければならない

もうこの世にいない その事実をしっかりと受け止めなくては

いつまでも引きずっていてはだめ

真実・事実を受け止める勇気を 誰かください

このぽっかり空いた この空間

いつになったら埋められるのだろう

私の選んだ道

いつまでも悲しみにくれていてはだめ

そんなことは十分わかっている

でも なんともいえないこの感じ むなしさ

命 いつかは潰える命

はかなく 切なく それでも大切な命

大切な人を失ったこのむなしさ わびしさ

どうすればいいのかわからない

私に一步踏み出す勇気をください

私に生きる希望をください

第二章 少女

少女は、幼少のころから体が弱い子供であった。

そのため学校へもほとんど行けず、同世代の友達もできない。むしろ「友達って？」というくらいである。友達という言葉の意味さえ理解できないのである。唯一の話し友達といえば通っている病院の看護士ぐらいのものであった。

通常では考えられないことである。そのためか少女の心は同世代の人たちとはかなりかけ離れた大人びた心となっていた。ただアンバランスな精神状態である。なぜなら学校というものをほとんど体験してないに等しいため同世代の心をつかめない成長過程を通過してないのである。

その結果、たまに学校へ行っても何をしていいのか全く分からなというのが少女の心境であった。だが少女は学校へはそれでも行きたい理由があった。それは陸上競技であった。学校では体育の授業、部活などで陸上がある。それを遠めに見ることが好きだったのである。それだけで少女には十分である。さも自分も走ったり飛んだりと自由に空想できるのである。無論、陸上競技などできるはずもない。テレビで観戦しては、さも自分も走っている姿を想像したり、学校では練習している風景を見ながら自分もその場所へ行っているような気持ちになっているだけである。それだけで少女には十分過ぎる理由であったのである。当然、学校ではいじめの対象になっていた。めったにこないし、授業にも当然ついてこれない、それだけで十分な理由であった。しかし、少女はいじめと取っていなかつた。むしろ戯れてくれているくらいにしか感じてないのだ。精神年齢が発達しているため、まるで妹か弟がすねているくらいにしか

見えないのである。小学校側も見て見ぬ振りである。何せ少女に何か異変があたり責任問題となるため、願わくは学校へ来てほしくない、仮に登校してきても学校を出るときまで何も起きないでくれというのが実情であつたろう。まことに残念なことである。

看護師はそんな少女の空想話をいつも微笑みながら付き合い聞いてくれるのである。だから少女にとっては友達であり心のよりどころとなつていたのである。その時間が一番幸せの時と感じていたのである。

少女にとって学校という存在はどのようなものであるべきなのか、何をするとところなのか、全く想像もつかないのである。

ところがそれを一変するちょっとした事件が起きたのである。そのことにより少女は別の意味で学校へ行きたい、本来の学校の意味を知るきっかけを得たのである。そして何より生きることの意味を深く考えることとなつていったのである。

それは何の前触れもなく突然訪れた。忘れられない事件が発生したのである。

なんと同級生の一人が話しかけてきたのだ。「何でいつもここにこないの?」、「来たらいつも私たちの練習風景を楽しそうに見ているよね?一緒に練習したい?」本当にたわいもない話であつた。それでもびっくりやらうれしいやら何と返答していいのか分からず、黙つていた。「どうして黙っているの?ごめんなさい。もしかして話せなかったの?だったらごめんね」少女からでた言葉は「何せ学校来て始めて話しかけられたのでびっくりして何と答えていいのかから話せばいいのか分からなかったの」である。それは紛れもなく少女の本心であつた。突然の出来事で少女の頭の中は真っ白になつていた。自分で何と返答したのかさえ覚えていない。空想でもなく本当に……

それからどのくらい話が続いただろうか。気づくと夕暮れになつていた。看護師との空想での会話ではなく少女の現在の心境を本心で話したことなどなかったから、時間さえも忘れて会話に夢中にな

ってしまっていた。それに気づいた少女は「学校って本当は楽しいんだ。何で私はこんななの」「どうして普通に学校に行けないの」と自分の状況を恨んだ。

本当に悲しくてどうしようもないくらい初めて現実を受け入れて泣いてしまった。心の中はどうだったろうか、それを察するとつらい本当につらい心境である。われわれには想像すらできない心境である。

それが少女にとって初めて経験する同級生という友達である。このとき生まれて初めて友達ができたという感動を覚えたのである。元気でありさえすればもっともつと沢山の友達ができたであろうに、しかし、現実是最初で最後の友達となるのである。

翌日から体調を崩し、入院となった。彼女の心は揺れていた。初めてできた友達、そしてもつともつと話をしたい、もつともつと陸上競技を見たいと……

願いが届くことは二度となかった。最悪の結果が待っていたのである。そんなことを少女は知る由もなかった。ただ感じていたのかもしれない。ベッドで一人たたずみながら涙でほほをぬらしていたのである。

友達が見舞いに来てくれた。こんなことも初めてである。看護師等もびつくりしている。ちよつとした自慢になった。はじめてみせる屈託のない心の底から笑っている彼女の楽しげな表情。いままで一番輝いている。でも看護師は十分理解している。「もう少し早くこのような友達ができていれば……」と心の中で泣き崩れるのであった。でもそこは看護師としてのプロ。表情一つ出さない。「今日はすごく楽しそうじゃない。よかったね」と言っただけなく様子伺いをしている。今回の入院は時期が近くなったことを理解しているからである。少女のしゃぎようといったら例えようがないくらいであった。そして少女の始めてみせる心遣いにもびつくりである。今まで家族しかお見舞いに来たことがなかったので、心遣いできるか心配になったのである。まるで親心である。そのくらい看護

士とは仲良くなっていた。むしろ看護師としては自分の娘、孫くらいに感じていたのかも知れない。だからこそいらぬ心配をするのだ。翌日、いつものように看護師が少女に接していると

少女から

「今日は外出してみたい。天気もいいし病室にずっといるよりたまには外の空気も感じてみたい。」と頼まれた。

今までそのようなことは一度もなかった。なぜなら少女も分かっていたからだ。自分の病気のことを。

それまでは、病院側からしてみれば優秀な患者であった。わがまま一つ言わず、病院側の言いつけをしっかりと守っていたからである。看護師はいよいよかと思いつけながらも表情には一切出さず、

「先生に聞いてみるね。OKもらえるといいね」といいながらドクターの元へ。ドクターへ相談。

「先生、あの少女が外出してみたいとはじめて自分のわがままを言うてきました。何と返答しましょう。」

しばらくナースステーションに重い空気がながれる。なんともいえない、今までに沢山の経験があるにもかかわらず今回のこの空気の重さはどうだろう。

本来なら許可など出るはずもない。そんなことは看護師は百も承知である。それでも今回だけは少女の願いを叶えてあげたい、そんな強い願いになっていた。

そんな中、ドクターから今回は特別に外出許可がおりた。

ドクターも察知したのである。

これが恐らく最初で最後の少女の願いになるであろうことを・・・そしてもう二度と少女が戻ってくることがないということを・・・看護師は急いで少女の元へ。そして息切れ状態になりながらも、悟られないように配慮しながら「先生から許可がおりたわよ」とにっこりと微笑んだ。

まさか許可が出るなんて思ってもいなかったのびっくりした表情になっていた。

「どうしたのそんな顔をして、先生が外出して思いつき羽を伸ばしておいでとおっしゃってくれたのよ。嬉しくないの」

許可が出たことを理解したその瞬間の喜びようといったら。無邪気な少女である。何も知らない少女は単純に喜んでいる。

「ねえ、どの服にしようかな？ねえ、装飾品はどれにしようかな？素敵な出会いがあるかな・・・」というはしゃぎぶりである。

看護師は一つ一つの少女の言葉に感動しながらも心の中では重たくつらくて、なんともいえない心境で泣いていた。

そして無事に病院へ戻ってくることを願いつつ・・・。

「じゃ、行つて来ます」

まさに家から出るときの挨拶。少女にとっては病院が家代わりのようなものであった。だから何の不思議もなかった。

少女は車椅子で出かけた。それも一人で。

看護師、先生がそれを見送っていた。

まるでもう二度と帰ってこないのを感じていたかのごとく少女の姿が見えなくなるまでずっと見送っていた。心の中で

「必ず戻ってきて」

と叫びながら。

「どこへ行こう」何も考えてなかった。とにかく外出したいという気持ちが通じたことによる喜びと期待感でいっぱいであった。「そうだ。いつも病室から見えている海岸に行こう」そう思い立ち目的地へ向かった。普通ならそんな遠くまで行けない。だけど何が少女を駆り立てるのか何の迷いもなく海岸へひたすら向かっている。まるで何か運命的なものを感じながら。近づけば近づくほど海のおいが感じられる。初めての海の匂い。「海の匂いだ。これがそうなのだ」と感動している。感動しながらもどんどん押し進む。こんどは波の漣が聞こえてくる「ざぶーん ざぶーん」テレビを通して聞いたことはあるが直接耳にしたのは始めてである。少女は思った「これが海。映像を通して見ていた海。こんなにきれいですごく大きい。はじめてみたけど吸い込まれそうなくらいきれいで、それで

いてすごく力強くて、それでいて暖かい。こんな感じは初めて。」「しばらく海を眺めていた。

「ここへ来てよかった。本当によかった。」少女は単純に海と出会えたことを素直に喜んでいた。「最近友達もできたしなんか最高の気分だよ。」少女は誰もいない海岸端で一人で話していた。しかしそれは一瞬、神様が与えてくれた幸福に時間。それもほんの一瞬。そんなこと知る由もないがそれでも少女は本当に嬉しかった。外出許可を出してくれた先生と看護師に感謝していた。

少女にこれから何が待ち受けているのか？少女は決して逆らうことのできないいたずらな運命を受け入れるしかない。

すきなことなどできない　もどかしさ

そんなこと　わかつている

それでも好き　どんなことが待ち受けていても

耐えられる　耐えて見せる　私の強い心

それでも　折れそうなとき

気づくといつもささえてくれた　あなた

希望　そうあなたは私の希望

たとえ叶わなくても　希望は　持ち続けるもの

それしか　それしか私にはできない

でも　それでも気持ち折れそうになつたら支えてね

ただそばにいただけでいい　それだけでいい

お願い　あなたが私の心の支え

どんなに傷つこうとも悔しくても　あなたさえいれば

乗り越えてみせる

あなたは私の心の支え　希望だから

ありがとう　いつまでも

怖いものなどない　おろかしさ

そんなこと　わかっている

それでもやれる　どんなことが待ち受けていても

耐えられる　耐えて見せる　私の強い心

それでも　倒れそうなとき

気づくといつもそばにいてくれた　あなた

勇気　そうあなたは私の勇気

たとえ叶わなくても　勇気は　持ち続けるもの

それしか　それしか私にはできない

でも　それでも倒れそうになったら支えてね

ただそばにいてだけでいい　それだけでいい

お願い　あなたが私の心の支え

どんなに傷つこうとも悔しくても　あなたさえいれば

乗り越えてみせる

あなたは私の心の支え　　勇気だから

ありがとう　　いつまでも

第三章 運命の出会い

きれいな海辺。車椅子に乗った少女とそれを押しながらゆっくりと歩いている男性がいた。まるで海と空と砂浜に融合しているかのようになくらい溶け込んでいる。

少女の髪をといっているかのような暖かい風。その様子を暖かく見守りながら微笑んでいる男性。まるで本当の親子のようだ。

空は二人を優しく見つめ、海は空からの贈り物の光を反射し、二人をきれいに映し出している。砂浜は二人の存在をしっかりと支え、まるで二人だけの心をその場に見事に浮き上がらせている。

いったいどうしてだろう。こんなにも美しい場面はめったに見られるものではない。大自然と融合し、まるで大自然と戯れているとさえ感じさせる二人の存在。

二人で話をしているというわけでもない。見合うこともない。何だろうこの二人。それ

でも二人話し合い、打ち合わせているかのような絶妙な呼吸、息の合ったもの同士でしかできないこの心地よい空間は何だろう。

いったい誰が想像できるであろうか、二人に重くのしかかった運命。二人は海を超え、空のあなたをずっと見つめている。それぞれの思いを込めながら、ただ見つめている。

空よ　いつまでも

まぶしさが目に焼きつく　　心温まる光

海よ　いつまでも

音が心に残る　　心地よいリズム

砂浜よ　いつまでも

心を支えている　　力が心にみなぎってくる

命　それは限られたもの

その限られた中で何ができるのだろう

少女は一人海辺で遠い海のかなたを見ていた。
また彼も同様であった。

思いは違えどもそれぞれ海のかなたを見ていた。
彼の背中姿は哀愁漂わせながら、なんともさびしげに眺めている。
いったい彼は何を考えているのだろう。

彼がふつと車椅子に乗った少女に気づいた。

「私と同じ目をしている」と感じた。

何気に近づいてみた。

まだ少女は気づかない。

近づきながら考えた。

「何を考えているのだろう」

「どうして一人でいるのだろう」

「少女に何があったのだろう」

「何故かさびしさを感じる。でも私とはどこか違う」

「なんだろう。少女から感じるこのオーラは？」

無償に少女のことが気になった。

少女も彼の存在に気づいた。

「私と同じ目をした人だ」

「どうしてこんなところに一人でいるの」

「家族はいないのかしら」

「何とさびしげな表情をしているのだろう」

お互い気になる存在となっていた。

そして少女が何気にさりげなく微笑んできた。

彼に何を話しかけたのだろう。

心という言葉で。

彼女の初めて微笑みかけてくれたときと同じ衝動であった。

しかし、何かが違うと感じていた。

彼は誰に頼まれたわけでもなく、ましてや少女に頼まれたわけでもないのに、気づくと少女の車椅子をゆっくりと押し始めていた。

まるでわが子を散歩に連れ出すかのごとく、ごく自然に。

「私は何をしているのだろう。少女は彼女とは違うのだよ」

でも一方では

「この少女をほつ」といってはいけない。何も理由などない。だけど、今少女をほつといたら後で必ず後悔する、そんな気がする。彼女も分かってくれている」

そう心の中でつぶやいていた。海の先にある空のかなたを見つめながら。

「あの空の向こうには何があるのだろう。きっときれいな場所があるのだろうな。行ってみたいな」

「どうすれば向こうへ行けるのだろう」

「そつえばこの少女もそこを見つめているのかな」
と、ふっと思った。

少女との会話は全くない。

ただ彼がなんとなく車椅子を押しているだけである。

不思議と少女も安心している。

二人の共有している時間と空間。

なんともいえない寂しさをかもし出している。

少女は遠くの空をじっと見つめているだけ。なんとも不思議な光景である。

特に二人の間には会話もない。

それでも違和感は全く覚えない。

まるでお互いの気持ちの一つの線になっているようにさえ思える。彼と心のなかに生きる彼女、そして少女、三人の心が見事に融合してきれいな虹になって空のかなたへと走っているような、そんな感じさえる。

岸辺の波

同じリズムできざむ波の音

こちよいい 髪をとく風

ふっと上を見あげると

遠くに広がる星の輝き

まぶしいばかりの光でわれわれを灯している

すべてを暖かく包み込もうとしている空

まるで私たちを見守っているかのよう

あの空のかなたへ行きたい

届け 私の魂

響け 私の心

いつも私を見守っていてね

私の心の叫び 届いて お願い

落ち着くりズムと音

心地いい きれいに髪をといてくれる 風

まるで私の曇った心を 洗い流しているよう

純粋な気持ちを注いでくれている

勇気と希望 そして 感動を与えてくれる

まるで今の私に必要なもの

すべてを与えてくれているよう

忘れていた勇気・希望 そして 感動

今 新たに心によみがえってくるこの強い気持ち

私の魂の叫び 届いて お願い

彼は感じていた。

少女が残り少ない命であることを。

「少女に何かしてあげられることはないのかな？」

「何をすれば喜んでくれるのだろう」

「少女は何を望んでいるのだろう」

やっと、自分のすべきことを思い出した。こんなところで踏みとどまっていたはだめだ。そうだ、彼女のためにも前へ進まなくてはいけないということにやっと気づいた。

それがゆえに見えてきたのだろう。

そつと少女の様子を伺ってみると、さっきまでのさびしそうな、むなしそうな姿であったとは明らかに違っているのに気づいた。

どこことなく強い心を持った、これから起こるであろう事をしっかりと受け止めようとしているその姿に。

彼はずつと考えながらただひたすら、ゆっくり車椅子を押していた。

「私に出来ること」
を。

心の中で必死に考えた。どうしたら少女にとって負担をかけることなくそれでいて一番よいことは何だろうと。彼女のときのことを思い出しながら

「本当に彼女にとって私は何が出来たのだろう。本当に彼女にとって幸せだったのだろうか？」

ずっと悩んでいた。後悔の念と反省ばかりしていた。彼自身、後ろばかり見ていて、肝心な前を見ることを忘れていたのである。そのことに気づいた彼はようやく少女に対し、自分に出来る最大限のことが分かってきたのである。

彼女のときと同様、少女の心を受け取り、自分の心の中で生きてもらうということに、彼女と少女、二人を背負って生きていくことが

二人にとって幸せなのだと確信できたのである。そうすることにより二人のこの世に存在したという証を残そうと決めたのである。彼女のときにそう思っていたはずなのにいつの間にか忘れてしまい、自分を見失っていた。彼女が少女と運命的にめぐり合わせてくれて私に気づかせてくれたのだと思った。彼女からの私へのプレゼントなんだと思い始めていた。

「そうだ。少女の新たな旅立ちを見守ってあげよう。彼女を見送ったように」

「そして少女の存在したことを心に刻んでおこう」

「確かにその少女はいたということ。存在を」

少女が最後に託そうとしている心・魂の叫びを受け入れる覚悟ができていたのである。

彼女のときとは少し違っていた。

彼女の時は、同僚でありそれから夫婦となり短い時間ではあったが会話があった。

会話が出来ない植物状態となってからは肌と肌で話をしてきた。そして彼女の夢を受け継ぐことによって彼女の存在したことを心に刻んだのである。そして彼女のこの世に存在した証として。しかし、少女からは何か違う印象を受けていた。

少女からは、命の重さ・大切さを訴えてきているように思える。生きることへの希望、生き抜くために必要な勇気を感じているのである。

そして少女も自分の短い人生の終止符が近づいているのを悟っていた。そして遠い空の向こうを見つめながら考えていた。

私は何のためにこの世に生を受けたのだろうか

この私に最後に来ることはないの？

このまま何もせずに終わりたくない

生きた証を 何か証が欲しい

何が出来るだろう

私の心の響きを誰か受け止めて欲しい

この人に何かしてあげられ事はないのかな？

すぐく心の温かいこの人へ

まるで私の心を包み込むような暖かい心

この人へ何かメッセージはないのかな？

そうだ

私はもうすぐ旅立つ

私は生きている意味などないと思っていたけどそれは違った

大きな間違いだということに気づいた

だって学校でも友達が待っていてくれた

そしていつも沢山の人が私を待っていてくれた

そして最後にこの人と出会えた

そう

私は一人ではなかった

人は一人では何も出来ない

周囲の人の力があって初めて生きることが出来る

少なくとも私はそうだった

みんなが私を支えてくれたから今の私がいる

みんなから生きる勇気・希望、生きているからこそ

味わえる感動がある

そうだ

彼にはこの心を受け取ってもらおう

みんなからもらった勇気・希望・感動を

そして支えてくれたみんなの気持ちを

そう、これを彼へ……

少女は自分にそう言い聞かせた。そしてこれが最高の彼へのお礼になると信じていた。

彼は少女を感じたように、暖かい心へと変わっていた。もちろん本人も自分の気持ちの変化には気づいていた。

少女の心と会話をすることにより命の重さ・大切さを理解できるようになっていた。

そうである。少女はしっかりと生きた証を残したのである。そしてしっかりと彼にその気持ちを渡したのである。

そう、少女の生きる勇氣・希望、そして人なら誰しも味わう感動がすばらしい贈り物であるというのに気づいたのである。

そして彼はそれらを心に刻むことによって生まれ変わったのである。

第四章 別れ

どれくらい過ぎただろう。もう回りはすっかり暗くなった。それでもまるでスポットライトを浴びた二人のようにそこだけ明るく見えた。

まるで三人の心がシンクロし、空のかなたへ飛び立つ姿が見える。

美しく強くなんとも形容しがたい三人の奇跡

海を越え空のかなたへと届け 三人のシンクロした魂

この暗闇の中で放たれた閃光

すばらしい まるで三人しかこの世に存在しないかすら思える

一度も会話はない。それでもまるで気心の知れたもの同士という感覚さえ覚えてしまうほど心という魂がシンクロしている。こんなことあるだろうか？

少女が何気に微笑んだように思える。彼を見ているわけでもない。

それでも彼には微笑が手に取るように分かった。

彼もそれを察して微笑んでいるように見える。

何だろう。

これから旅立とうとしている少女の気持ちをやさしく包み込んで
いる。少女は彼の暖かい心に触れて安心している。

新たな旅立ちを見届けてくれた彼への感謝の気持ちを顔の表情で伝
えているのか、すごくやさしい表情。

しばらく二人、その場にたたずむ

今の彼の表情に曇りは全く見受けられない。むしろすっきりとした、
自信に満ち溢れた、それでいてすべてを包み込むような暖かいオー
ラをかもし出している。どうしたことだろう。なにが彼をそうさせ
たのか分らない。でも確かなことは生まれ変わった彼がそこにい
る。

そう　彼も新たな旅立ちをしたのである。

少女から勇気・希望　そして感動をもらい生まれ変わったのだ。

晴れ晴れした表情、一片の影もなし。すばらしい顔となって明日へ
と旅立つ勇気を出し現実・真実と真っ向勝負し、勝手も負けてもそ
れを受け止めよう。

それだけの勇気を少女は私に託してくれた。

挫折しても生き抜くことで見出される希望を私に託してくれた。
生きることの感動を私に託してくれた。

少女へ、なんと落ち着いた表情で「ありがとう」と心の中で言っ
た。

あなたは私の心の中に生き続けます。そして、私の心にいつもささ
やいてくれます。

「勇気を出して」

「希望を持って」

「感動して」

と。

私の心に宿るあなたの勇気と希望と感動

確かにあなたは空のかなたへ旅立った

でも 私に与えてくれた すばらしい贈り物

私は忘れない

あの日のことを

私の曇りきつた心をきれいにして 生まれ変わったあの日のことを

今頃あなたは何をしているのだろう

きっと また 誰かに 生きることのすばらしさを伝えているのだ
ろう

私は旅立つまでに何ができたのだろう

私はあなたに勇気と希望・感動を残すことしかできない

悔しい あなたに何も残すことができなくて

私も弱い人 だけどあなたに何かしてあげたい

私の魂　届け　あなたの心へ

空のかなたからあなたへ

勇気・希望そして感動を忘れないで

届け　私の心

受け取って　私の気持ち

ありがとう　私の気持ちを受け取ってくれて

私はあなたを心の中に迎え入れることで
勇気・希望・感動をもらいました。
素直な気持ちで入れることを感謝します。

彼は、彼女が託してくれた夢を実現すべく、そして、少女がくれた
生きることへの希望・生き抜くための勇気、そして感動を持って、
自分のするべきところへ帰っていくのである。

二人の心と魂を、しっかりと胸に刻んで。

三人の心を包み込む暖かい空

三人の魂を乗せて走る海

二人の心と魂を受け取った彼をしっかりと支える大地

彼は二人の思いを胸に刻み明日へ向かって走り出したのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8962k/>

人は生まれ変わる

2010年12月31日18時39分発行